



写真-1 佐津川橋から下流を撮影（令和2年5月）

■ 但馬漁火ラインから佐津川下流を望む

上の写真-1は、主要地方道11号・香美久美浜線（日本風景街道の一つ「但馬漁火ライン」*1）の佐津川橋から佐津川（さづがわ）下流方向を撮ったものです。目の前の橋梁は、JR山陰本線の佐津川橋梁、その向こうに見えるのは町道橋の佐津川橋で、この橋には斜張橋の歩道橋（通称「さづっ子橋」）が併設されています。この付近は河口に近く、流れもほとんどない状態ですが水はきれいです。

そして、前方に見える山の麓が佐津川の河口です。河口の東には、海面上昇による谷の沈水でできた入り江を佐津川が運んできた土砂が埋めてできた佐津海岸があり、写真-2のように長さ700mの白い砂浜は佐津海水浴場となっています。砂浜が白いのは、佐津川中流域に分布する宮津花崗岩の影響と思われます。

写真-1のように、日頃は穏やかな表情を見せている佐津川ですが、江戸後期には「蛇（じゃ）抜け」により「大山津波」（大規模土石流）が発生し壊滅的な被害を受けたことが、佐津川上流にある三川権現社（みかわごんげんしゃ）の「三川山（みかわさん）縁起鈔」に記されています。当時の人々にとって、蛇行した川を流れ下ってくる土石流は、山から抜け出した大蛇が流れ下ってくるように見えたのかもしれません。



写真-2 魚見台から佐津海岸を望む

※1 但馬漁火ライン：兵庫県豊岡市気比から香美町を経て、新温泉町居組（国道178号）を結ぶ日本海沿いを走る主要道路。兵庫県で初めて国土交通省の「日本風景街道」に、たんば三街道とともに選定された。全域が山陰海岸国立公園に属する東西約50kmの但馬海岸は起伏に富むリアス式海岸となっており、山陰海岸の美しい自然景観を楽しみながら走行することが出来る。（脇見運転に注意！）6月から10月にかけての夜にイカ釣り漁船の漁火が灯ることから名付けられた。

■ “蛇抜け”による「大山津波」が佐津の海を黄土の海と化す

一般県道 256 号・三川下岡線を佐津川に沿って南下していくと、三川権現社に着きます。

三川権現社は、修験道の開祖・役行者（えんのぎょうじゃ）が天武天皇の白鳳 3（674）年に蔵王権現※2 を勧請して開いたと伝えられ、境内に立てられた案内板「三川山縁起鈔」によると、大和の大峯山、伯耆（ほうき）の三徳山（みとくさん）と並んで日本三大権現に数えられているそうです。

第 45 代 聖武天皇の御世を経て第 49 代 光仁天皇の宝亀元（770）年に至りて、一万余坪の聖域に十間四面の壮麗なる蔵王堂を中心として諸堂、塔頭（たっちゅう）、宝蔵、僧房等、伽藍十八宇悉く落慶し、聖武、光仁両天皇の勅願による山陰鎮護の祈願道場と定められました。

以来、山陰屈指の霊場、但馬国総祈願所として、歴代国主、諸公をはじめ一般の尊崇いよいよ篤く隆盛を極め、また神変御流 修験道の根本道場として、奥の院に散在する行場、百余町歩余りに、坊舎五十余宇、白衣の行者常住して修行に励んだと言われていました。

毎年 5 月 3 日に春を呼ぶ大祭「三川権現まつり」が開催され、全国各地から修験者や山伏が集まります。知恵の炎で煩惱を焼き払うという柴灯大護摩法要（さいとうおおごまほうよう）はこの祭りの呼び物の一つです。ただ、令和 2（2020）年は新型コロナウイルスの影響で護摩供養が関係者により執り行われただけで、権現太鼓奉納など一切なかったそうです。

また、「三川山縁起鈔」には、天保 3（1832）年 3 月に発生した大規模土石流によって壊滅的な被害を受けたことが以下のとおり記されています。

第 105 代 後奈良天皇の天文 7（1538）年、雷火に依り奥の院を除く伽藍悉く山火を伴って焼失す。後、15 宇の諸建造物の再建なるも天保 3（1832）年 3 月、空前の南風吹き荒れ、全山 5m を超す積雪一時に溶け、現在の本坊より約 1.5km 奥にある通称「底無しの沼」「蛇（じゅ）抜け」と称する山岳の崩壊に依り発生せる、但馬有史以来と言われる大山津波のために、一万余坪の境内、十間四面の蔵王堂、伽藍諸堂、宝蔵、大梵鐘その他すべて 15 宇、流失または地底深く埋没し、大山津波は 13km 下流の佐津の海を黄土の海に染めしと言う。



図-1 佐津川を河口部から源流域まで表示



写真-3 権現橋（この橋が二級河川の上流端）



写真-4 三川権現社



写真-5 三川権現社の蔵王堂

※2 蔵王権現：日本独自の山嶽仏教である修験道の本尊である。正式名称は金剛蔵王権現、または金剛蔵王菩薩。インドに起源を持たない日本独自の仏で、奈良県吉野町の金峯山寺本堂（蔵王堂）の本尊として知られる。「金剛蔵王」とは究極不滅の真理を体現し、あらゆるものを司る王という意。権現とは「権（かり）=版」の姿で現れた神仏」の意。

■ 『三川山大変手続之覚』

『香住の地誌』に収録されている『奥佐津村誌』（大正元年10月）の第11章（天変地異）には、「三川山大変手続之覚」が掲載されています。天保3（1832）年4月3日に、美含郡（みくみくん）三川山・弥勒寺と同支配所の長谷寺が寺社奉行所に宛てた嘆願書および同年4月某日に、三川村（幕府領）三人役（庄屋、年寄、百姓代）が大庄屋に宛てた嘆願書です。句読点もなく意味不明な語句もあって、しかも“候文”でかなり読みづらいのですが、被害状況や必要な救援物資が詳しく記されているので紹介します。

① 嘆願書（弥勒寺・長谷寺 ⇒ 寺社奉行所） 天保三年辰四月三日

天保元（1830）年8月の洪水の際、三川山およそ百間程（≒180m）大荒れになり、その後大雨の折は、度々水が湧き出しましたが格別のこともありませんでした。天保3（1832）年3月晦日（30日）に南風が吹き荒れたので、雪解け水が流れ、時間が経つにつれて山の樹木が流れて来て、水は泥水にて川筋ばかりを流れていましたが、夕方の五つ（20時）頃より山が大きく抜けたのか、十丈（≒30m）程の高さで流れ出し、神明社、権現堂、行者堂、稻荷堂、牛頭天王社（ごすてんのうしゃ）、鐘突堂、称勤寺（たぶん弥勒寺の間違い）土蔵、舞殿などの建物、境内の樹木などがあつという間に流失し、屋敷は跡形もありませんでした。（中略）同夜四つ半時（23時）頃12軒、土蔵その他建物残らず一度に流失し跡形もない有様でしたが、ご制札は別条ありませんでした。このことだけは安心しましたが、以上のような大災害で米が流失してしまい恐れ入ります。もっとも田地が少々残っております。

以下に被害状況が列記されていて、その冒頭に「向水手無御座候併人牛別条無御座候」とあります。

天保3年3月30日は、西暦でいうと1832年4月30日になります。香美町は豪雪地帯ではありますが、今の感覚でいうと、融雪期（地域差はあるが一般的に3~5月）ではあるものの、4月末に大量の雪が解けずに残っているというのが信じられません。暖かい南風が吹き荒れて一気に解けた大量の雪解け水が土の中に浸み込んで地盤が緩み、大規模な斜面崩壊を引き起こしたと考えられます。

夜の8時頃に斜面崩壊が発生し、大規模な土石流によって三川権現社の建物はことごとく流され、村は4丈（≒12m）も埋まってしまったようですが、「人や牛も別条なく御座候」との記述のとおり人的被害がなかったというのは奇跡といえます。弥勒寺の住職は、ご神体を守って山へ登り災難を免れたらしいので意外と余裕があったのかも。また、生活再建も気になります。土砂はそのままにしてその上に家を建てたのでしょうか。そうであれば、掘り返すと当時の家屋が出てくるのかな？

② 乍恐奉願上口上之覚（三川村三人役⇒大庄屋所） 天保三年辰四月某日

これは、三川村三人役から大庄屋宛てに出された嘆願書で、米30石（1石は成人1人が1年間に消費する量）の提供を願っています。筆者が中途半端に訳すとかえって誤った解釈になる恐れもあるのでこの辺で止めます。ご了承を！

■ 荒廃砂防事業により整備

佐津川の上流部では、既述のような大規模土石流災害があったためか、かなり以前から砂防施設整備が行われています。

権現橋から約500m上流の佐津川が二股に分かれる地点直下に築造されているのが「三川堰堤」（写真-6）です。これが佐津川の上流部にある堰堤と思われます。左岸袖部に埋め込まれた銘板には、施主名、施工業者名とともに「通常砂防工事、三川堰堤、昭和41年4月着手、昭和41年9月竣工」と刻まれていました。堆砂敷は、下の写真のようにほぼ満砂状態^{※3}でした。さらに奥に行き、崩壊跡地を見たのですが、クマとの遭遇が怖くて断念しました（一応熊よけの鈴は持っていました）。

※3 満砂状態：これで砂防堰堤の機能が失われているわけではなく、堆砂による河川勾配の緩和により流下エネルギーを減少させる機能および洪水時の緩勾配区間での一時的堆砂による流出土砂の調節機能は何ら損なわれてはいない。また、河川の不安定土砂の固定や側方の山脚を固定し山崩壊を防止する効果も期待できる。満砂により砂防堰堤の機能がなくなっていると誤解する人が多い。



写真-6 三川堰堤



写真-7 ほぼ満砂状態の三川堰堤堆砂敷

そして、平成 3 (1991) 年度から 7 (1995) 年度にかけて荒廃砂防事業（水と緑豊かな溪流砂防事業）により、三川権現社の前を流れる佐津川の延長 520m 区間において、砂防ダム 1 基、床固工 4 基、そのほか自然石を用いた岩組護岸や階段護岸などが整備されています。



写真-8 階段護岸工



写真-9 床固工と両岸の階段護岸・岩組護岸



写真-10 事業区間の最上流に設置された砂防ダム

■ モノローグ

三川権現社の隣には、「ぼっくり尊」という仏様も祀られています(写真-11)。老いてから大往生できるというもので、苦しみを身替わりに背負ってくれるという代苦仏です。

筆者は、大往生でなくてもいいので、死ぬ時には人に迷惑をかけず、とにかく「ピンピンコロリ」で往生できるように拜んで帰りました。

ところで、災害の記憶を伝える「あぶない地名」というのがあります。長い歴史の中で、幾度も天変地異に遭っている土地では、先人が災害を示唆する地名をつけていることが多く、地名を知ることによって災害を予見し、我が身を守ることができる場合があります。自然災害や地形から付けられた「地名」は、ある意味、自然災害への戒め、警告、メッセージであり、石碑などと同様に「先人が残した災害の教訓」とも言えます。



写真-11 ぼっくり尊

昭和 51 (1976) 年 9 月 13 日、台風 17 号による連続雨量 550mm に達する降雨が原因で、一宮町（現・宍粟市一宮町）福知で大規模な地すべりが発生しましたが、その地名は「抜山（ぬけやま）」でした。

ただ、『聞こえの悪い地名は変えてしまえ』という風潮の中で古くから使われていた地名が変えられて、表面的にはその危険性がまったくわからなくなってしまっている土地もあります。名称が変わることで、その土地に根付く伝承、災害の歴史も人々の記憶から忘れ去られてしまうのは残念なことです。



写真-12 三川山登山口近くに咲いていたシャクナゲ



写真-13 三川権現社近くに咲いていたシャクナゲ

シャクナゲ（石楠花）

ツツジ科ツツジ属シャクナゲ亜属の低木の総称。ツツジ属は便宜上、落葉性のツツジ類と常緑のシャクナゲ類とに分類されるが、日本で「シャクナゲ」と呼ばれるものはホンシャクナゲの仲間に限られる。全木・葉に毒が含まれ、嘔吐、下痢、痙攣、呼吸麻痺などの症状を引き起こす。日本では古くから「山の精」と考えられ、神棚に捧げる神聖な木として扱われていた。そのため、「高嶺の花」は元々シャクナゲのことを指していたといわれている。

【参考資料】

- 1 『香住の地誌』 香住町 平成3年3月
- 2 『三川権現社』 但馬の百科事典
- 3 『怪異・妖怪文化の伝統と創造～蛇抜けと法螺抜け』 斎藤 純 平成27年1月
- 4 『災害の記憶をいまに伝える日本全国「あぶない地名」』 「週刊現代」 平成27年8月29日号
- 5 『福知の地すべり～その後の土砂災害シリーズ-12』 兵庫県土木部砂防課
- 6 『砂防堰堤の効果・機能』 東北地方整備局新庄河川事務所HP
- 7 『但馬漁火ライン、蔵王権現、美含郡、石』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
- 8 『植物資料集～シャクナゲ』 Key 雑学辞典 平成19年2月 http://www.7key.jp/data/vegetation/menu_s/syakunage.html#what

※発行：令和 3（2021）年6月 『続・ひょうご水百景』 No.128

改訂：令和 8（2026）年4月 『ひょうご水百景』 No.128